

令和5年度 第2回 静岡市発達障害者支援地域協議会会議録

第1 日 時 令和5年12月12日（火）午後1時30分～午後3時00分

第2 場 所 葵消防署7階 講堂

第3 出席者

(委員) 大塚玲委員（会長）、岩田真喜子委員、佐藤博司委員、五條智久委員、

早川恵子委員、内田雅子委員、名倉美紀委員、大石立子委員、

前島恵美委員、吉澤純委員、森竹高裕委員、

井島秀樹委員、中原美華委員、木林薰子委員

(事務局)

福井障害福祉企画課長、神田障害者支援推進課長、

谷口こころの健康センター事務長、野ヶ山精神保健福祉課長、

子ども若者相談センタ一生田指導主事、大石児童相談所長、

こども園課佐野主幹兼副主幹、松下参与兼子ども家庭課長、

商業労政課渡辺雇用労働政策担当課長、

寺尾特別支援教育センター所長、

静岡市発達障害者支援センター稲葉主幹、杉本副主任、福田副主任

第4 欠席者 石原憲委員

第5 傍聴者 一般傍聴者 1名

報道機関 0社

第6 次 第 1 開会

2 挨拶

3 協議事項

(1) 静岡市発達障害者支援センター「きらり」の活動について

(2) 静岡市発達早期支援事業（あそびのひろば・ぱすてるひろば）
について

(3) 静岡市の発達障がいに関する取り組みについて

(4) 今後の検討事項について

4 情報共有

静岡市静岡手をつなぐ育成会「しづおかおでんジャー」について

5 全体を通しての意見交換

6 閉会

次第3

(1) 静岡市発達障害者支援センター「きらり」の活動について

(大塚会長)

ただいまの説明に対しまして、ご質問、ご意見、補足説明等がございましたらご発言をお願いします。

(木林委員)

きらりの先生方には長年、お世話になっているんですけれども、現状やっぱり2年に1回ほどしかサポート強化事業に回っていただけないくらい、先生方がすごくお忙しいと思っております。サポートで該当しなかったときも時間を作ってきていただいて、4回クールで見ていただくのが、継続して見ていただくということありがたいんですが、やはりコロナ禍の後、幼児乳児が言葉の遅れですとか、コミュニケーションが遅れてる子がかなり増えてきている現状がありまして、そうした中で今の現状でも先生方がとても大変そうなので、職員配置等、もう少し人数が余裕ができたらありがたいと思います。

(大塚会長)

きらりに対する相談支援体制の意向要望ということで承りました。他にいかがでしょうか。小学校の現場の意見をふまえて森竹委員よりご意見お願ひいたします。

(森竹委員)

今年きらりの巡回型コンサルテーション型支援を受けているんですが、本校にとって有益な事業をしていただいている、というふうに思っています。各学級を見ていただいて、気になるお子さんを見つけていただき、そのお子さんに対してどのような支援をしたらいいかという助言をいただきます。これが職員にとっても大変良い学びの場になっています。その子供の見方とか、それから接し方で私達の欠けているところを指摘するというよりも、指導の仕方を認めていただきながら、さらにより良い支援ということを、教えていただくので、この事業を今後も継続していただけるとありがたいなと思っています。

(前島委員)

制度のお話を今まで伺っていて、増えるといいと思っていたら、たくさんのお申込みがあったということで、やはり本当に必要とされているんだなと思いました。このように巡回して、いろいろお話を伺えるということは、本当に子供も親のためにもなりますし、子供のためになるので、ありがとうございます。ぜひこれからも、先生がおっしゃったように、増やしていってもらえるといいなと思いますが、と、人事的なものがどうなのかなと思います。

(大塚会長)

他にご意見ある方いらっしゃいますでしょうか。

(中原委員)

いつもこの部会指導は私達にとっては、本当に心温まる支援いただいて本当に大切なサポートなのですが、もう半ば、私の園も3～4年も来てもらえない等ということもあり、諦めている園もあります。静岡市全こども園、保育園、幼稚園の数を考えると、15園というのは本当に少ないと思います。今後の見通しがあればお願ひします。

(発達障害者支援センターきらり)

今園さんに伺うような事業は私達の事業や、また大学の先生やお医者様が事業と様々ありますので、他の方とご相談しながら、今一度どういったようなサポートが園さんにあるのかという整理をしまして、その役割を検討していきたいというふうに考えております。

(中原委員)

先にぜひ考えていただきたいのが、きらりさんのいいところは、年間通して3回、初めと一緒に子供の目標を立てていただいて、私達がその手立てを実践して課題に直面しますよね。そうすると、その課題に直面した課題に、また一緒に考えていただいて、皆様にそのまとめをしていくという流れがとてもいいので、そういった形で進めていただければ大変助かります。

ただ現場の方からしますと本当にこの支援が、役に立っているということですので、ぜひご検討いただければと思います。

(大塚会長)

きらりとしては、色々な事業をしているところですが、現場からの意見としましては、この支援が本当に役に立っているということですので、ぜひご検討いただければと思います。他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、次の議題にうつります。

(2) 静岡市発達早期支援事業（あそびのひろば・ぱすてるひろば）について

(大塚会長)

ただいまの説明に対しまして、ご質問、ご意見、補足説明等がございましたらご発言をお願いします。

(中原委員)

度々すいません、ちょっと勉強不足で教えていただきたいのですが、この1歳半健診で、

4,055 人中要フォローの子が 1,001 人の 25% ありましたが、あそびのひろばに通う子は、264 人でして、その他 740 人くらいの子たちは要フォローとなっているのでしょうか。

(事務局)

あそびのひろばを希望しないという保護者の方が多くいるのが実際です。例えば、保護者が就労していて子どもはこども園に預けているので、平日の昼間にあそびのひろばに通うことはできないという保護者さんがいらっしゃいます。また、定員数を超えるとお断りするというパターンもあります。

希望する人には全てあそびのひろばに来て欲しいという考えがありますので、来年度あそびのひろばの開催箇所数は増やしたいと動いています。また、あそびのひろばを希望しない保護者に対しても、あそびのひろばや発達支援の周知をした方がいいということを担当課で考えておりまして、周知についても取り組んでいく予定であります。実際、あそびのひろばを希望しない保護者が多いという現状があります。

(中原委員)

保育園で 1 歳前から 3 ヶ月から来ている子なんかはここで引っかかることもあります、あと最近はすごく保護者の中で多いなというのは、1 歳半健診で早く保育園に入れた方がいいっていう専門家のアドバイスをいただくので、慌てて働いて保育園に行かせますという方がいます。おそらくここでのフォローがなく、認識されていただけれども、こういうあそびのひろばに行くことができないから保育園っていう形がすごく増えているのではないかと思います。支援が本当に必要な子たちに支援が届くように体制を整えてほしいと思います。今働いている方が多いので、一緒にその子のことを親子でみていける体制が必要かなと思いましたので、ぜひ検討をお願いします。

(大塚会長)

他にはいかがでしょうか。

(木林委員)

私も中原先生も同じような現場において、やはり 1・6 健診で引っかかった子たちが集団に行けば、言葉が増えるかもしれないということを保健所さんから言われたということで、こちらの方でお預かりしているのですが、やっぱり 3 歳までのところが前回の会議でもお伝えしたと思うんですけども、保育園や事業所さんに丸投げ的なところがあつて、そこをちょっとケアしていただけたらありがたいなというのが現場の声ではあります。

(岩田委員)

1・6 健診の発達の早期発見というものの、あそびのひろばやぱすてるひろばに繋ぐって

いうのもとてもいい試みですけど、もう一つ、この資料4の方の表を見ていただくと、かかりつけ医っていうところがあるって、1. 6健診から発達のチェックのところで引っかかったお子さんは、かかりつけ医にも健診の結果がちゃんと伝わるようにという仕組みもできます。保育園に行くから、あそびのひろばにいかないというお母さんは結構いるかと思います。そのときに確かに2歳のところで、地域の保健師さんから、言葉の方等はどうなりましたかという連絡が入るんですが、それでもやっぱり大丈夫と言っているため、そのままそこをスルーになってしまっている人もいるのが、現状です。やはりかかりつけ医の私達がもうちょっとこの辺のところでうまく介入してあげた方がいいのではないかということを私は考えていて、2歳で言葉が増えてこないということは、やはり、放っておくと、なかなか伸びてこないと思うので、そこで保健師さん等も熱心にやってくださるんですが、あまり関わりの少ない保健師さん等がおっしゃることにあまり心がちょっと響かないことがあります。かかりつけ医には、本当に2ヶ月ぐらいからワクチン等で月に1回ほどかかり、交流があるので、やはりかかりつけ医の方が少し、やはり少々気になるので、こういうものもあるから利用するかといった誘いや、ぱずてるひろばに繋ぐ等、できるのではないでしょうか。あとは今児発が結構できています。この児発を利用している人と、かかりつけをもう少し連携できる等、情報共有できるような仕組みができるのではないかということを思います。

(大塚会長)

他にはいかがでしょうか。

(前島委員)

本当に、親の気持ちとしては、そこが認められるか認められないか、気がつくか気がつかないか等ということが、その後に生きていると思うので、やはり本当にその辺りは、きちんと連絡をこまめにしていけるといいなと思います。ですが、小児科の先生たちは発達障害等については、皆さん、とてもよくわかってらっしゃると思っていいでしょうか。私も本当にワクチンを打つのに、同じ小児科にずっと通いましたが、うちの子は知的障害ももちろんありました。が、あまりそういう話はそこで出たりしなかったです。本当に医療行為だけでした。今は時代も違うので、今はどうなのかなって思いました。先生によるという感じなのでしょうか。

(岩田委員)

大変関心を持っている人と、あまり関心をお持ちでない方と、もちろん熱量は様々だと思います。ただ、熱量があまりない先生でも、こういうことは日常の診療の中でやってくれそうという仕組みを作りたいと思います。そして、ここに引っかかるならばもう専門のところにお願いしましょう等、その見張りと言ったらちょっと言葉がよくないかも知れないですが、そういう誰でもこのレベルまでだったら、チェックできますという形が作れたらいい

と思っています。

(前島委員)

ありがとうございます。本当におっしゃる通りだと思います。よろしくお願ひします。

(3) 静岡市の発達障害に関する取り組みについて

(4) 今後の検討事項について

(森竹委員)

今ご説明がありました市政変革研究会の資料の中で、小学校段階のところの36番、Wi-Fi環境の特徴があるのですが、次のような実態があります。GIGAスクール構想で、宿題等も、Chromebookで行う宿題が出されています。AIドリルというものが普及し始めていて、宿題としてAIドリルを出すのですが、放課後児童クラブに行くと、そこにはWi-Fi環境がないので宿題ができないのです。家に帰って7時とか、ご飯食べてそこから初めて宿題ができる状況になることが、今課題になっています。ただ、学校としては、Chromebookで宿題を出したいものですから、そのあたりはジレンマを感じています。担当課が違うと思うのですが、学校教育施設課では、タッチしできないので市全体で環境整備していただけるとよいと思います。また幼児言語教室等も先生たちが指導されていると思いますが、そこもWi-Fiの環境、インターネット環境がなく、困っているという実態があり、なかなか予算化していただけないと聞いています。インターネットが繋がっていないとできないような時代になってきているので、そのあたりの整理をしていただけたとありがたく思います。

(大塚会長)

貴重なご意見をありがとうございます。おっしゃる通りで、そういう環境を整えるということが重要だと思います。また事務局にはご検討いただければと思います。他にはいかがでしょうか。

(五條委員)

15から18歳より後で、発達障害を基盤に、情緒的な苛立とかあばれとか、そういう方を中心を見ることが多いです。資料の5番の15歳あるいは18歳で支援があつても、患者さんの社会生活や余暇活動を考えたときに、相談する場所が弱くなってしまいます。ここでの医療センターも、きらりの先生たちにとてもお世話になったりするんですけども、また引き続き、この時代からまた社会に繋がること、なかなか大変なので、そんな機能を成人期以降の、相談機能の拡充をお願いしたいと思います。

(大塚会長)

他にはいかがでしょうか。

(吉澤委員)

青年期以降の発達障害の話がちょっと出ましたけれども、きらりさんにおかれましては、大学での窓口でご相談をされているので、非常に画期的なことをされていると思います。ただ一方で、退職される発達障害者の方々は、大学や高校卒業したけれども、採用面接でなかなか就職ができない方もいれば、採用されて就職はしたけれども、人間関係であったり、職務遂行であったり、あるいは自らの体調面であったりしてなかなか仕事が続かずに、中にはうつ病等、二次障害を発症されて結構ボロボロにされて来られることは少なくありません。私どものセンターに来られる際に、関係機関の紹介っていうのはあるのですが、結構ご自分でホームページを探して、私どものセンターに来られる方も少なくありません。一方で、大学とか高等教育を卒業してしまっていますので、なかなかそれ以前の様子ですとか状況ですか、私達もアセスメントするんですけども、具体的な状況を知るということがなかなかできないような状況もあって、結構幼少期から成人期まで一貫して支援がなされておらず、ぶつ切り状態になっていると思います。それは関係機関の繋がりが薄くなっているというところもあると思いますし、その繋がりのあり方が個人情報保護ですか、あるいはご本人たちのご都合ですか、そういうことがいろいろ書かれていますので、青年期以降のところをぜひ目を当ててください。

(大塚会長)

では、私からも意見を申し上げます。今のご意見に追加してですが、やはり青年期の課題はとても大きいと思います。義務教育が終わってからの支援の場所ということで、高等学校についても発達障害の支援は少しずつ充実をしているのですが、発達障害のある子が、高校に進むっていうことはかなり進んでおり、進学されているのですが、どちらかというと、公立高校ではなくて私学の方に進んでいる子の方が多いです。本会議でも、井島委員が高校教育課の指導監として出ていらっしゃるのですが、多分実際は公立高校よりも私学の方がそういう対象の生徒が多いのではないかというふうに思っています。この資料5にも私立高等学校への支援の必要性って書かれていますけど、まさに私もその通りだなと思っております。私立の高校に通っていらっしゃる方、発達障害の生徒をどのように支援していくかっていうことも、やはり検討してしなくてはいけないと思います。この会議のメンバーに私学の高校の委員がいないということを、どういうふうにしていくかっていうことは今後検討の必要があるかなと思います。

他にはいかがでしょうか。

(大塚会長)

医療現場から静岡市の発達障害に対する支援体制について、ご意見があれば伺いたいのですが、岩田委員いかがでしょうか。

(岩田委員)

ちょっと先ほどの話とかぶってしまうのですけど、子ども園の園医等もしているのですが、落ち着かないなという子が来ると、先生がどのくらい張りついていますといった感じで教えてくださるのですが、例えば加配をつけました。あとは児童発達支援事業所を利用している等、そのところでなんとなくとりあえ加配がついている、加配をつけましたとか、児発に入りましたっていうところで、なんとなくそれでよしとしているかというのを感じるときがありまして、また結局自分たちの仕事と、やっぱり重ねて考えてしまうのですが、そのところもやはり医療が見守りをして、やっぱり加配がついていても、やはり保育園の生活でこういうところが困るから、もう少し専門的な病院に相談に行ってみる等、その辺りのところを、やっぱり私達ちゃんと一緒に子供の発達を見守っていかないといけないなっていうことを感じていますというのが自分の感想です。

(大塚会長)

同じく、佐藤委員いかがでしょうか。

(佐藤委員)

私も自分のところで始めてもう 20 年以上経ちますが、2 歳 3 歳の頃からきた発達障害の子供さんたちが、だんだんだんだん大きくなり、特別支援学校の高等部ぐらいになっています。そうすると、一応それは本当は駄目なのかもしれないですが、小児科から手が離れてしまいます。正直、この子たちはこの後どういうふうに社会の中で過ごしていくのかということを気にしながら、でも中学を卒業したら、僕らの手から離れていくわけですが、ここにいらっしゃる方たちの話を聞いて、こういう方達がいろいろ考えてくださってありがたいなと思って、今日はちょっとお話を聞かせていただいておりました。本当におっしゃる通り、子供の頃からひろっていくのは大事ですが、その子たちも今は高校生で、大学には行かないだろうけれど、もっと年をとっていくわけで、その方たちはやっぱり一貫して繋いでいくのが大事だなと思って、今日のお話を聞かせていただいております。

(大塚会長)

ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

(中原委員)

この前ですが、岩田先生がおっしゃっていた、園の職員の意識が加配がついてればよい、児発に入ればよいと考えている人がいることについて、そういうものはとても寂しいことだ、という話を園長会の中でもさせてもらいました。園にいる子は障がいのある子もない子もみんな一緒なので、この子たちをしっかり育んでいきましょうということを確認させてもらいました。ありがとうございました。ただその中で、私達もすごく小児科の先生に助けていただきたいときがあります。保護者の方が発達や就学について相談したい、発達検査

をしようと決心しても、お医者さんの予約待ちが多いものですから、本当に3ヶ月、4ヶ月予約待ちで市内でも、発達検査をやっていただける小児科が少ないです。その辺りは今後、数が広がってくるのか、それとも先ほど言ったようにかかりつけ医で、そういうところの対応をしていただけるのか。どうなんでしょうか、教えていただきたいなと思います。

(岩田委員)

発達検査をしてくれるところが増えるかどうかは、多分難しいのではないかなと思います。園の先生方に対して、加配が付いているからそれで満足してしまっているとそういうふうに受け取られるような言い方になってしまったのかなと思うんですが、やっぱりその加配をつけるということになった時点で、ちょっとかかりつけの先生にもそれ伝えておいてと言って、実際私のところには、この子は加配がつくっていうふうに園から言われた等、そういうふうに言ってくださるお母さんもいらっしゃいます。やはりその辺のところを、知つておきたいです。そうすると、違うことで来た時にも、園楽しく行ってるの？とかその辺の話をすることができるので、できれば、そういう新たななか試みをする時は、いつもいくかかりつけ医に言っておいてとか、そういうふうに言っていただけると、ギリギリの時期に発達検査とかではなくて、もっと前もって対応できることがあるのではないかなと思います。

(中原委員)

ありがとうございます。

(大塚会長)

他にいかがでしょうか。

(前島委員)

後ほど情報共有で、前回お話をさせていただいた静岡おでんジャーの啓発活動の動画をちょっと見ていただくのですが、そこでお話をさせていただこうと思っていたのですが、この間12月9日の土曜日に、市内の中学校区の健全育成大会があり、1時間の講演を行ってきました。私の経験から言うと、この健全育成会の大会というのは、希望者は希望すれば参加できるのですが、大体PTAの委員になった人が多数動員されるような感じです。つまり、あまり関心ない方もいっぱい参加されるのです。それで、講演後でアンケートをいただいたんですが、どの方もたくさん感じたことを、皆さんいっぱい書いてくださってあって、私達はとてもびっくりしました。それで、初めて知ったとか、具体的な言葉掛けがわかった。子供たちに見せてほしい、我が子への接し方を考えさせられたなどの意見がありました。また接客業をしている方も、お店に来たときに、やはりどうしようか迷っているなど、私達の活動へのたくさんの応援があって、みんなで読んで、とても温かい気持ちになりました。今、本人にどういうふうに切れ目ない支援をやっていくかということの協議会ですが、やはり

こういう周りの人たちに知ってもらうことが大事だと思います。私も子供がこういう子でなければ、そんなに知らなかつたということがいっぱいあるので、皆さんに、周りの人に知ってもらうということが、とても大切だと思っていて、そういう清水の育成会も私達よりずっと前からキャラバン隊をやっているので、同じ市に2つあるというところは珍しいと思います。それで、出前講座のような仕組みを作ってもらえたらしいなと思っています。

(大塚会長)

他にはいかがでしょうか。

(名倉委員)

私は今日自閉症協会で来ているのですが、先ほどお話がありましたように、清水に清水手をつなぐ育成会でキャラバンをやっております。そしてこの間、民生委員さんに披露したのですが、そのときの感想には、少しハードルが高いというか、知らないことが多すぎて、とてもわかりやすく話しているのですが、まず発達障害と知的障害とか自閉症とかの区別もわからないから、まずどういう人がどんな人かっていうところのレベルだったという話でした。そして、先ほどきらりさんのお話の中からいろんなとこに訪問されたりとか、さっきのP連とかそういうところ親御さんと先生とか、一緒に聞ける機会のときに、きらりさんのような方が講演に行かれて、学校の先生ときらりさんだけだと、親御さんに気づいてもらえなかったりとか、軽度の方でお勉強はすごくできるけど、空気が読めないと言って、大学生になってから気がつかれる方というのがやっぱり強度行動障害等に繋がっていってしまうことがありますので、そういう学校の代表の保護者の方や先生等、一緒の場で発達障害者の特性の話等ができる場があるといいです。今コロナでちょっとP連等の活動がオンラインになってしまったりとかしたこともあると思いますが、これからまたそういうことが広がっていったときに、そういう環境下のところで、そういう機会で親御さんと先生とその発達障害に詳しい方とお話しする場があったら嬉しいと思いました。

(大塚会長)

ありがとうございました。

(大石委員)

今の話を聞いていて思ったのですが、体験談を話させていただくと、息子が小学校の時に、先生が学年単位で、特性についての授業をしてくださったことがありますて、それが小学校2年か3年のときでした。おかげさまで6年生までとても素晴らしい環境の中、小学校生活を送れたと思います。私自身も別に公表を最初からしていましたので、お母さん方の懇談会のときには、子供がこういう特性があると、少しでも何か気になることがあったら伝えてほしいというお話をさせていただいていたのですが、それは私が公表していて子供にも知っ

ている状況だからできたことなんですけども、それで保護者の方たちも、とても理解ができていました。その後、小学校4年か5年になると、実は私の子供がという相談が私に入ってくるようになりますて、それはとてもいい環境だったと、私は思いました。言ってくださったことがすごくいいことだと思いましたのでちょっと伝えさせていただきました。

次第4 情報共有について

～しづおかやおでんジャーの動画「バス停で」視聴～

次第5 全体を通しての意見交換会

(森竹委員)

私達の学区に駿府学園という少年院があります。先日そこで研究授業をやるので、参観してくださいという依頼があって、施設と共に参観をさせていただきました。実際に5人の院生に、ソーシャルスキルトレーニングを行ったんですが、内容は院を出た後に、知り合いの先輩から怪しげなバイトを誘われたときにどう断るかという内容でした。院生がいわゆる不良という感じではないのです。本当にどこでもいる高校生で、言われなかつたら全くわからないなというふうな感じでした。少年院の方に、どんな方が今入所するのですかって聞きますと、境界値の方が多いということでした。IQで言うと70から85くらいです。特別支援学級とか特別支援学校に繋がらないで卒業し、周囲の人に流されてしまうことで、結局犯罪を犯してしまう方が、今少年院に多いという話を聞きました。その境界知能の方を救っていく、支援していくことは非常に難しいことだなということを思いました。支援学級に入らずに通常学級にいる子供はたくさんいると思いますし、そこに全部全ての子供に支援の手を差し伸べるというのは、そういう体制を作るのは、非常に人と予算がかかることだと思います。そこにどうやって支援の手を差し伸べて、そういうところから、犯罪を犯さないような生活をさせるのは、どうしたらいいのかということを考えさせられました。特別支援教育センターの所長もよく話をされてるんですが、やはり、通常学級の先生やその社会の中での大人が、そういう視点を持って接することとか、生活しやすいこと、学びやすいことをつくる、またそういう意識を持つってことが大事だと思います。

そういう意味できらりの訪問支援事業などは私達にとって、とても学びのある多くの子を救ってあげるような場になっているということを感じました。

(大塚会長)

貴重な情報をありがとうございました。境界知能のお子さんの問題ということは、やはり今結構クローズアップされてきて、知的障害でもないしなかなか支援が届かない等、色々な課題がありまして、うまくいかない場合は、今のような二次障害的なこともあると言われています。ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

(五條委員)

私も何かトピックス的なことなのですが、犯罪白書で少年院等に入っている何%かは虐待があると報告されておりましたけど、それと同じようにネグレクトもあるのです。育ち上がりの中で発達障害というふうに育ち上がり、そういった方がストレス系に記憶が飛んでしまう。発達障害の現れが基盤にはあるが、ストレス性の現れを強めやすい方が今後診断とかで関わってくると思うのです。きらりの先生たちにいつもお世話になってはいるが、今後は医療とか福祉とかあと障害福祉や児童相談所、そういった何か複合的に支援が組まれるべき方が多くなってくると思うので、その時もまた今後ともよろしくお願ひします。

(大塚会長)

ありがとうございます。ご指摘のとおり、今後連携というのが必要になってくると思います。他にいかがでしょうか。

(井島委員)

県教育委員会の高校教育課です。高等学校を所管しているのですけれども、改めてこの資料4のような形で、小さい時からアセスメントされて支援されていることが分かりました。実際県立高校の生徒数はどんどん減っている状況にある中で、特別支援学校や特別支援学級の生徒が、ずっと増えているという現状です。数字のことだけ言うと異常でもあると感じながら、それは、こういうような丁寧な支える場があるからこそであり、就学支援ということだということを感じています。

先ほど会長から、私立高校に行く生徒が多いというお話をいただきました。それは公立高校の方で十分支援ができていないということの裏返しでもあるのだろうなと思います。現状、特別支援学級の生徒（自閉情緒）あるいは中学校で通級指導を受けていた生徒は、高校に通っている生徒が実際に多いわけです。その中で以前から、県内に静岡中央高校という県立の通信制があって、私学ではキラリ高校（クラ・ゼミが母体になっている）（これは狭域という狭い域の通信制という、狭域通信制）があって、かつ、日本航空高校とかクラーク記念国際高校等、広域通信制があります。私は県教育委員会に10年近くいるので、ずいぶん現場から離れている現状があるのですが、私が現場にいた頃、今から10年以上前くらいのことですが、その広域通信制に行く生徒というのは、県立高校・私立高校で頑張ってきたけれどもどうしてもいろいろ困り感があって、そのセーフティネットのような形で広域通信制を選んでいた状況がありました。今は、中学校を卒業して最初から広域通信制（N高等学校などもある。多様な選択肢が増えた。）に、とても大きな人数が行っているという現状があります。広域通信制に行けば、進級あるいは場合によっては大学進学も、より自分のペースに合わせられるメリットがある一方で、いわゆる人との関わりというところで、本来高校が持っていたような役割を、全日制の高校に通いながらそういうものを求めるという保護者や本人はたくさんいます。

県立高校においては、大塚先生にもお手伝いいただいておりますが、通級指導であるとか、コミュニケーションスキル講座であるとか、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーであるとか、あるいはいろんな形の介助員を入れる中で、高校の中で一緒に、発達障害がある（一部軽度の知的障害がある）生徒も一緒に学びながらですね、そういうような中で高校生活が送れるような環境整備に努めているところです。その中で、きらりのように、県立高校に対して直接ご支援いただいている点について大変感謝しております。

（早川委員）

あそびのひろば・ぱすてるひろばからいこいの家の親子教室へ紹介されるお子さんは、今年度2歳児のお子さんたちなのですが、もう現状の枠でいっぱいになってしまったと担当の方から報告がありました。月齢が来ると、まだこの後12月、1月、2月、3月で2歳になるお子さんたちもいらっしゃいますので、どのように受けいいったらいいかというのは、お部屋と職員の数があって難しいところなのですが、できるだけ受け入れをしていきたいなっていうことがあるのですが、早期の支援の取り組みの中で、この後がどういうふうになつていったかという、検証ができていくとこの先の5年か10年間の取り組みに向けて、具体的に何をやっておいたらいいのかとか、わかってくるのかと思います。今この親子教室に通ったお子さんの中ではほとんどのお子さんが保育園や幼稚園に行かれており、いこいの家や他の発達支援を利用される方の方がどちらかというと少ない現状です。ですが就学支援委員会に行くと、親子教室に来ていた子たちの名前が特別支援学級とか特別支援学校に入るというところに上がってきているので、やはりずっと継続した支援が必要になっていくお子さんが、半分くらいはいるということを、肌感としては感じていますので、大きくなつしていく中でずっと切れ目のない支援というのが継続して、幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校・社会人というふうに、体制が整うといいなと思っております。

（内田委員）

うみのこセンターでは、母子療育ということで、お子さんへの支援とあわせてお母様方へのフォローさせていただいて感じたことですが、今、こうしていろいろな支援体制が整つていてとても素晴らしいことだと感じています。乳幼児期にいろいろな発達障害のことがわかって、いろいろ進められた点等はありがたいことで、色々なそういった支援が整備されて整つていて、このところが素晴らしいと思っております。やはりいくら周りが支援をしようと思っても、親御さん自身のお気持ちが、そちらに向かわないとなかなか進んでいかないのかなと思います。その時期に親御さんがお子さんのところを受け入れられるかどうかっていうのはわからないという話が出ておりました。お子さんの支援だけではなくてぜひその保護者の方の気持ちのフォローであったりとか、保護者の方を支えるといったところの体制が整備されていくといいと思います。

（大塚会長）

他によろしいでしょうか。

ないようでしたら、本日の議事は終了します。ありがとうございました。